



政務をボイコットしてしまふ事件が起こっている。そこで、困った道真は、宇多上皇から公卿たちに執り成しの御言葉をいただいて、ようやくみんなの協力を得られるようになった。この一件などは、どうみても道真に対する他の公卿のいやがらせであり、露骨に反発する空気が強かったことをうかがわせる。

このような状況に加えて、道真の娘たちが宮中に入っていたことも、他の公卿から警戒された一因ではないかと思われる。娘の一人寧子は、宇多天皇のお側近くに仕える尚侍になっているし、また衍子という娘は、宇多天皇のお妃に準ずる女御になっている。

さらに重要なことは、娘の一人が齊世親王に嫁いだということであろう。この齊世親王は、醍醐天皇より二つ下の弟君で、かなり優れた方である。このように道真は、娘を二人も宇多天皇の後宮に入れ、また一人を醍醐天皇の弟君に嫁がせていたのであるから、その方面でも、藤原氏などが脅威を感じていたことは否めない。

そこで、道真のことを快く思わない人びとは、宇多上皇の信任を得て身のほど知らずの高い地位についた道真のことだから、ひよっとすると醍醐天皇を早々に退位せしめて、自分の身内ともいふべき齊世親王を新しく天皇に立てようとしているのではないか、という疑いをもつようになったのではないかと思われる。

しかも、ここで見落としてならないことは、道真という人がたんに個人として優れた学者であるだけでなく、その一門が宮廷社会でじつに大きな力をもっていた、ということである。当時の大学は、要するに優秀な官吏を養成する唯一の最高学府であったが、その大学へ入るため、またさらに大学院クラスの得業生へと進むため、とくに私塾で勉強する学生が少なくない。道真は、そのような私塾として著名な「菅家廊下」をいとなみ、有能な学生たちを特訓していたのである。

道真の「書齋記」という文章をみると、「秀才進士、此ノ局ヨリ出ヅル者、首尾ホゞ計ルニ、百人ニ近シ。故ニ学者、此ノ局ヲ目シテ龍門ト為ス」とある。これによれば、この菅家廊下で勉強して、大学の進士（文章生）や秀才（文章得業生）に選ばれた者が、ほぼ百人に近いというのだから、大へんな勢力である。今日でも中央官庁には、東大の法学部を出た人が多く重要なポストを占めるといふような状況がづづいているが、当時の大学はひとつしかなかったから、そのなかでも特別に優秀な人材を百人近くも輩出した菅家廊下は、まさに文人官吏の登龍門とみなされていたわけである。

ちなみに、辞職を勧告した三善清行も、門流を異にするライバルの一人であるが、のちに「外帥（大宰権帥道真）ハ累代ノ儒家、其ノ門人弟子、諸司ニ半バセリ」と

のべている。それだけに、道真はたんなる学者文人としてだけでなく、そういう優秀な官僚を育成する指導者として、政界に隠然たる力をもっていた。それが藤原氏や源氏などの人びとに少なからぬ脅威を与えていたことは、想像にかたくない。

もう一つの要因をあげるとすれば、道真の人柄もけっして無関係ではないと思われる。道真という人は、学者にありがちな潔癖で繊細な神経の持ち主であつたように思われる。

前述の「書齋記」をみると、朋友についての議論があり、友達のなかでも一番困るのは、親しそうな顔をして私の書齋へ入りこみ、文具や書物などに平気でイタズラをする連中だと嘆き、「唯、我ヲ知ル者ハ其ノ人三許人有ルノミ」とのべている。いわゆる飲み友達とかくだらない遊び友達は迷惑だというような気持から、どちらかといえば孤高を持するタイプではなかつたかとみられる。

また道真は、政治家としても清濁併せ呑む式ではなく、理知的で直言型の政治家であつたと思われる。今でも、平生おとなしくて物静かながら、言うべきときは利害を離れて堂々と正論を主張する人が稀にいるけれども、道真は多分、そういうタイプの紳士だったのであろう。

たとえば、遣唐使の問題に関して、当初は道真自身、遣唐大使の役を引き受けながら、まもなく派遣の中止を建言している。これは一見矛盾した言動のようにも思われよう。しかしながら、道真としては、勅命により遣唐大使に任命されたものの、だんだん調べてみると、唐は内乱などで凋落してしまい、いまさら巨費を投じて大陸へ行って学ぶべきものは少ない、ということに気づいたのであろう。そこで、建白書のなかに「国ノ大事、独リ身ノ為ノミニアラズ」とのべているとおり、これはまさに国益にかかわる重大事だからこそ、遅まきながら、あえて派遣の中止を願ひ出たのだと思われる。

これをみても、政治家としてはちよつとタイミングのずれた下手な建策といわれるかもしれないが、道真としては、遣唐使の無益なことに気づいた以上、黙って成り行きに任せることはできなかつたのであろう。この点を曲解して、道真は荒波を越えて大陸へ渡るのが怖いから逃げの手を打つたんじゃないか、などと誇る人もあるが、そんな個人的問題ではあるまい。大局的な見地から、遣唐使を送る意味を熟慮した揚句、まさに国の大事としてその中止を建言せずにはおられなかつたのであろうと思われる。しかし、そういう言動が人びとの誤解を招きやすかつた、ということはいえるかもしれない。

このようにみてくると、道真が天皇廃立を計画するようなことは断じてなかったであろうが、破格の昇進を快く思わない人びととか、後宮にも官界にも隠然たる勢力をもっている菅家一門に対して脅威を感じていた人びとなどは、容易に人を寄せつけない道真の人柄や、また妥協を許さない直言にも反発を覚えて、あらぬ疑いをかけたのであろう。その中心人物は、古来いわれているように、おそらく左大臣の藤原時平や大納言の源光あたりではないかと思われる。